# 図書館員のための音楽知識

東京音楽大学
甲田　潤

# 本講座の目標

利用者が求める音楽資料の概要が理解できるようになる。

○基本的な音楽用語のほか、西洋音楽史･
日本音楽史の流れを把握し、代表的な楽曲、
楽器、編成の基礎的事項を理解する。

# 目次

Ⅰ　西洋音楽編

1. 中世
2. ルネサンス
3. バロック
4. 古典派
5. ロマン派
6. 近･現代

Ⅱ　日本音楽編

1. 古代･･･平安
2. 中世･･･鎌倉、室町
3. 近世･･･江戸
4. 近現代･･･明治、大正、昭和初期 / 20世紀半ば～

# 西洋音楽編

# 1.　中世

【中世の特徴】
5、6世紀頃から14、15世紀頃までと見なすのが一般的。
ローマ・カトリック教会の典礼音楽(聖歌)の発達が西洋音楽の源流となる。

【中世の音楽に関する用語】
・ミサ曲：カトリック教会の典礼であるミサにおいて、通常文(キリエ、グローリア
など常に同じ式文が歌われる部分)に作曲された音楽。
死者のためのミサはレクイエムと呼ばれ区別される。

cf. ミサ固有文：教会暦に従い、特定の日ごとに固有の式文を持つ部分。

cf. 聖務日課　：ミサと並び、聖歌が歌われるカトリック教会の主要な儀式。

・グレゴリオ聖歌　:ミサや聖務日課で歌われる単旋律の聖歌。
教皇グレゴリウス1世（在位590－604）の名にちなむ。
聖歌隊教育機関のスコラ・カントルム（ラテン語で歌の教室）
がその発展に寄与した。

・単声音楽　:旋律が一つの声部で歌われる。
＝モノフォニー

・多声音楽　:複数の独立した声部を持つ音楽。
＝ポリフォニー　⇔　モノフォニー

・対位法　:多声音楽を支える音楽理論。それぞれの声部に独立性を
持たせ、旋律を如何にして絡ませるかという西洋音楽の作
曲技法。

・教会旋法　:中世から16世紀までのヨーロッパ音楽の音組織。
グレゴリオ聖歌に使われた。

・ノートル・ダム楽派：12世紀後半～13世紀パリのノートル・ダム大聖堂を中心に栄えた楽派。初期ポリフォニーの発展に貢献。
音高だけでなく、音価やリズムを表記する必要に対し記譜法の発展を促す。

・アルス・ノヴァ　：14世紀のフランスで栄えた音楽様式。「新しい技法」の意。新しいリズム法と記譜法を論じた音楽理論書『Ars nova』（フィリップ・ド・ヴィトリ著、1322頃）にその名が由来。
←　それ以前をアルス・アンティカ（Ars antiqua;古い技法）

ギヨーム・ド・マショー（1300頃-1377）：《ノートル・ダム・ミサ曲》

・トレチェント音楽　：14世紀、北イタリアで栄えた多声音楽。
リズムを重視したアルス・ノヴァに対し、旋律を重視した。

# 2. ルネサンス

【ルネサンスの特徴】
15世紀から16世紀にかけての約200年間を指す。
ルネサンスは、古代ギリシア・ローマ文化の復興運動を意味する。
伝統的な教会旋法にもとづくポリフォニー技法が最も高度な水準に達した時代。

【ルネサンスの音楽に関する用語】
・ブルゴーニュ楽派：15世紀フランス、ブルゴーニュ公国に栄えた楽派。
　ギヨーム・デュファイ（1400頃-1474）：ミサ曲《私の顔が青ざめているのは》

・フランドル楽派　：15世紀半ばから16世紀末に活躍したフランドル地方出身の音楽家。ルネサンス音楽を主導し声楽ポリフォニーの黄金期を築く。
　ジョスカン・デ・プレ（1450頃-1521）：ミサ曲《パンジェ・リングァ》

・ローマ楽派　　　:ローマ教皇のシスティーナ礼拝堂を中心に活動。
伴奏のないア・カペラの合唱様式を特徴とする。

ジョヴァンニ・ピエルルイージ・ダ・パレストリーナ（1525頃-1594）:

《教皇マルチェルスのミサ》

※パレストリーナ様式を確立。

・ヴェネツィア楽派:16世紀末から17世紀にかけてサンマルコ大聖堂で活躍。
コンチェルタート様式や複合唱様式の発展に貢献。
2台のオルガン、合唱と金管アンサンブルを配したスタイルが特徴。

クラウディオ・モンテヴェルディ（1567-1643）:オペラ《オルフェオ》

# 3. バロック

「バロック」＝ポルトガル語で「歪んだ真珠」の意。過剰な装飾を批判した用語。
およそ1600-1750年(※)の間のヨーロッパ芸術音楽に対する時代様式概念。

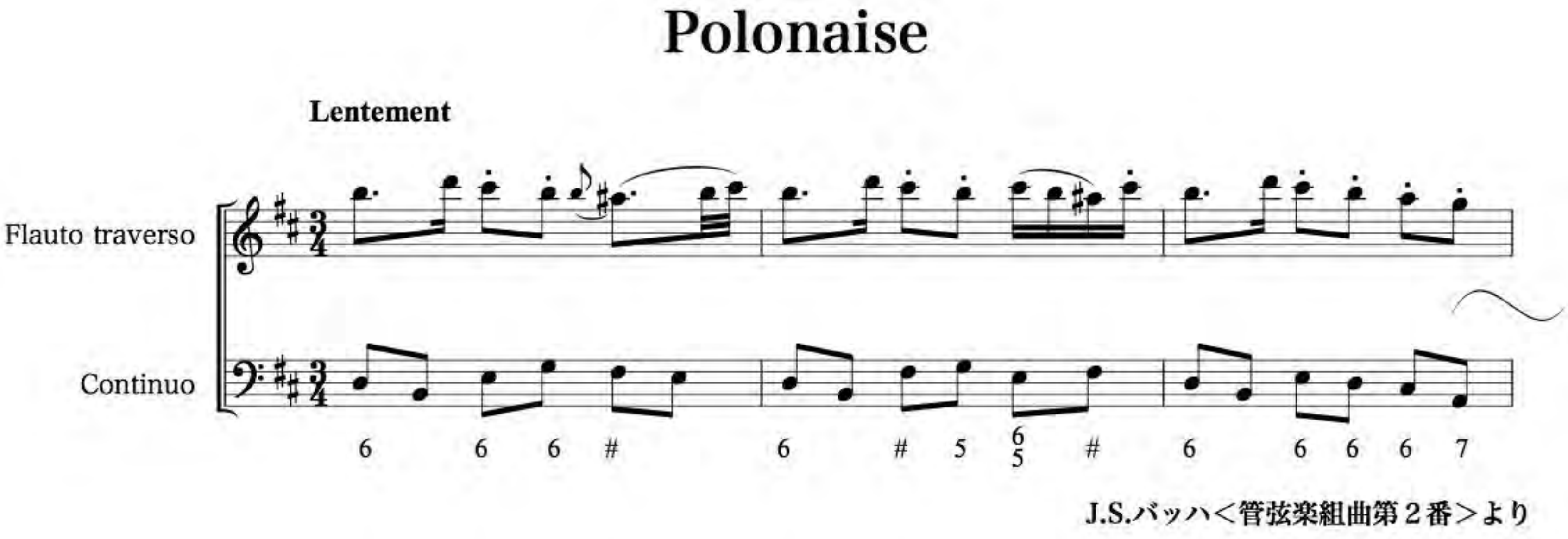
(※)1600年 - 最古のオペラ《エウリディーチェ》の初演
1750年 - ヨハン・セバスティアン・バッハの没年

【バロックの特徴】

・“通奏低音の時代”
・教会旋法の崩壊　～長調・短調の調性音楽の世界へ～
・器楽
　－　組曲など器楽曲の発展
　－　鍵盤楽器の隆盛　・・・ クラヴィコード、チェンバロ(英ハープシコード)
・声楽
　－　オラトリオ、カンタータの創出
　－　劇音楽(オペラ)の誕生

【バロックの音楽に関する用語（器楽）】

・通奏低音：バロックに特徴的な通奏パート。
楽譜上には低音部に数字が記されている。
演奏者はその数字付低音に、即興で和音を補いながら演奏。
一般にチェンバロやオルガンなどの鍵盤楽器と低音用旋律楽器（ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェロなど）が混用される。




・組曲　：バロック時代においては、同じ調性で速度や拍子の異なる古典舞曲を組みにしたものを意味する。当時大変好まれたジャンル。

・ソナタ：イタリア語のsonare（鳴り響く、演奏する）が語源。器楽曲のこと。

– 教会ソナタ：教会で演奏することが前提。多声的で、且つ、重厚感がある。舞曲は含まない。
– 室内ソナタ：王侯貴族の宮廷などで演奏することを前提に作られた。舞曲の組み合わせを基本とする。
– トリオ・ソナタ：上声部＋通奏低音の三声部書法。四つの楽器を使用。
  – 上声部 – 旋律楽器二本（ヴァイオリンなど）
  – 通奏低音 – 低音楽器（チェロやヴィオラ・ダ・ガンバなど）
    鍵盤楽器（チェンバロ、オルガンなど）

・協奏曲（コンチェルト）

– 合奏協奏曲（コンチェルト・グロッソ）：トリオ・ソナタの複数ソリスト「コンチェルティーノ」とオーケストラ全体「リピエーノ」が協奏するもの。
  J.S.バッハ：《ブランデンブルグ協奏曲》
– 独奏協奏曲（ソロ・コンチェルト）：ソリスト(*)とオーケストラが協奏するもの。 (*)楽器の種類によりヴァイオリン協奏曲などと呼ばれる。
  アントニオ・ヴィヴァルディ（1678-1741）：《四季》

## 【バロックの音楽に関する用語（声楽）】

・オラトリオ　：聖譚（せいたん）曲と訳される。
一般的に宗教的題材に基づく叙事的楽曲。
ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685-1759）：オラトリオ《メサイア》

・カンタータ　：独唱・重唱・合唱などに器楽・管弦楽の伴奏が付いた大規模な声楽曲。
– 教会カンタータ
J.S.バッハ：カンタータ第140番《目覚めよと呼ぶ声が聞こえ》
– 世俗カンタータ
J.S.バッハ：《コーヒー・カンタータ》

・モノディ様式：フィレンツェのカメラータによって生み出された様式。
詩のリズムと内容が音楽より優位に立つ。
歌と話し言葉の中間のような旋律を、通奏低音（和音）付きで歌う。

［オペラの誕生］

古代ギリシャ悲劇の復興を目的にカメラータの活動から誕生。

ヤコポ・ペーリ（1561-1633）：《エウリディーチェ》（初演は1600）

ジュリオ・カッチーニ（1545頃-1618）：歌曲集《新音楽》（初演は1602）

［オペラの2形態］

・オペラ・セリア　：「正歌劇」とも言われる。ギリシア神話や伝説的英雄を題材にする高貴かつ真面目なオペラ。

クラウディオ・モンテヴェルディ（1567-1643）：《ポッペアの戴冠》

・オペラ・ブッファ：庶民的喜劇的なオペラ「喜歌劇」。もとは3幕もののオペラ・セリアにつく幕間劇であった「コメディ」が発展したもの。

ジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ（1710-1736）：《奥様女中》

## （参考）オペラの音楽的要素

・序曲
・前奏曲
・歌　ー　独唱　ー　レチタティーヴォ、アリア等
　　　ー　重唱　ー　二重唱や三、四、五重唱等
　　　ー　合唱
・間奏曲
・フィナーレ
（※）構成は作成された制作年代、また、作品や演出により様々。
　　レチタティーヴォの部分がセリフで語られるようなオペラもある。
　　ex. ジングシュピール（モーツァルト：《魔笛》）やオペレッタ等

レチタティーヴォ　：叙唱。オペラの進行に必要な会話を話すように歌う。
　　言葉の抑揚に忠実で叙述的。

アリア　：詠唱。演じている役の気持ちを歌う。
　　独唱者が情緒の表現をするために歌う曲。
　　劇中の大きな見せ場。

## 【バロックの作曲家】

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685-1759）

ドイツ・ハンブルグにてオペラで成功を収めた後、イタリアでイタリア・オペラやカンタータ、オラトリオといった劇場用の作曲家として地位を固め、その後イギリスに帰化した。

作品目録番号：

バーゼルト番号（HWV；Händel–Werke–Verzeichnis「ヘンデル作品目録」）

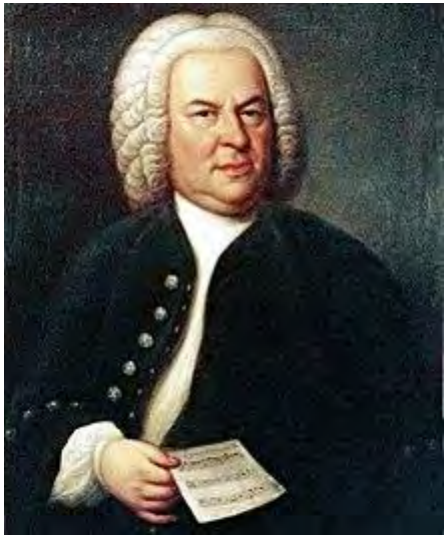
作品例：

《リナルド》HWV7

《水上の音楽》HWV348–350

《王宮の花火の音楽》HWV351

# ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）



教会音楽を中心に作品数は1,000を超え、バロック音楽を集大成したと言われる。

大バッハとも称され、J.S.バッハと略される。
作品目録番号：

シュミーダー番号（BWV；Bach−Werke−Verzeichnis「バッハ作品目録」）

作品例：

《マタイ受難曲》BWV244

《トッカータとフーガ ニ短調》BWV565

《平均律クラヴィーア曲集》BWV846−893

《ゴルトベルク変奏曲》BWV988

# 4. 古典派

18世紀半ばから19世紀初頭に及ぶ。主にハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらを中心とするウィーン古典派の音楽をいう。

【古典派の特徴】

・楽曲における構成美の重視

　－ ソナタ形式の確立

・ 交響曲の発展

・機能和声法の確立 － 調性（長調・短調）が教会旋法から独立

・通奏低音の衰退、消滅

・ポリフォニーからホモフォニー（和声音楽）中心へ移行

・チェンバロに代わりフォルテ・ピアノ（独ハンマークラヴィーア）が発達

・楽器の性能の向上 － ディナーミク（音の強弱法； $f$, $p$, $<$ $>$ ）の普及

　～フォルテなどの記号で音の強弱に細かい指示を与えるような時代に～

## 【古典派の音楽に関する用語】

- ソナタ形式 ：3部形式の楽曲形式の一つ。
  基本的に序奏・提示部・展開部・再現部・結尾部から成る。二つの主題が用いられ、それが提示部・再現部に現れ、展開部において様々に変容される。

- 交響曲（シンフォニー）：18世紀後半に現れてきたジャンル。管弦楽用のソナタであり、原則的には多楽章の形式をとる。ハイドン、モーツァルト～ベートーヴェンの手法で完成。

- 室内楽曲 ：本来は宮廷のなかで私的に演奏された音楽の総称。
  現在は独奏楽器からなる小編成の器楽合奏を意味する。
  ― ピアノ三重奏曲、弦楽四重奏曲など。

- 弦楽四重奏曲 ：四つの弦楽器を使用。
  二本のヴァイオリンとヴィオラ、チェロという構成。

【古典派の作曲家】

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）

大貴族エステルハージ家の宮廷楽長として
生涯の大部分を送る。

数多くの交響曲、弦楽四重奏曲を作曲し、
「交響曲の父」「弦楽四重奏の父」と呼ばれる。

作品目録番号：

ホーボーケン番号（Hob.）

※ジャンルによってⅠからXXXIに分類される。
　概ね作曲時代順に通し番号が付されている。

作品例：

《交響曲第94番ト長調「驚愕」》Hob.I:94

《弦楽四重奏曲第77番「皇帝」》Hob.III:77

《天地創造》Hob.XXI:2

## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）

生涯の前半は領主司教の宮廷音楽家を務める。最後の10年間は宮廷から離れウィーンで自由な音楽活動を行う。

作品目録番号：

ケッヘル番号（K.）

作品例：

《交響曲第41番「ジュピター」》K.551

《フィガロの結婚》 K.492

《ドン・ジョバンニ》 K.527

《レクイエム》 K.626

《ピアノ・ソナタ第11番「トルコ行進曲付き」》K.331

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）

宮廷や劇場、あるいは教会との雇用関係を中心にした旧態の音楽家の在り方から、市民層に向けた新しい音楽市場を開拓。

公開演奏会・楽譜出版の隆盛などを招いた。

*作品番号は、ベートーヴェン自身が存命中に付与したop.（オーパス）のほかにWoO（没後に付与された整理番号）などが用いられる。

作品例：

《交響曲第5番「運命」》 op.67

《交響曲第9番「合唱付き」》 op.125

《ピアノ協奏曲第5番「皇帝」》 op.73

《ピアノ・ソナタ第23番「熱情」》 op.57

# 5. ロマン派

19世紀初頭から20世紀初頭に及ぶ。
市民社会の発展の時期にあたり、大衆を意識した音楽が多く誕生した。

【ロマン派の特徴】
・自由を求めるロマン主義的思想が音楽にも影響を与えた時代
　ー「形式美を追求する音楽」から「個人の感情や個性を重視する音楽」へ
・楽器の改良 ー ピアノ音楽など器楽曲の発達
・文学、絵画などとの結びつきを追求した音楽様式が発展
　　ー　歌曲
　　ー　標題音楽・交響詩・楽劇の開拓
・楽曲および編成の巨大化
・民族意識の高揚

【ロマン派前期】

・ドイツ国民歌劇(ドイツオペラ)の確立

・ドイツ・リート(歌曲)の発展

・ピアノ小品の流行

　－　ピアノ曲で作曲家は華やかな技巧を披露

【ロマン派前期の作曲家】

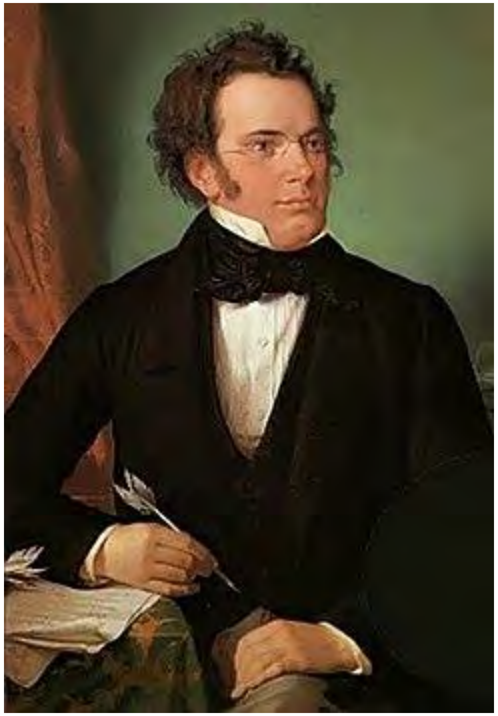
カルル・マリア・フォン・ヴェーバー(1786-1826):オペラ《魔弾の射手》
フランツ・シューベルト(1797-1828) :《ピアノ五重奏曲「鱒」》

フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847) :オペラ《真夏の夜の夢》

ローベルト・シューマン(1810-1856):歌曲集《詩人の恋》

フレデリック・ショパン(1810-1849) :《幻想即興曲》
　(「ピアノの詩人」)

## フランツ・シューベルト（1797-1828）



各分野に名曲を残したがとりわけドイツ歌曲 （リート）において功績が大きく「歌曲王」と呼ばれる。

作品目録番号：

ドイチュ番号（D）

作品例：《交響曲第7番「未完成」》D759

・通作歌曲：詩の各節にそれぞれ異なった旋律が付けられた歌曲。

例）《魔王》D328

・有節歌曲：詩の各節が第一節に付けられた旋律を繰り返す歌曲。

例）《野ばら》D257

・連作歌曲：全体でまとまりをなすように構成された一連の歌曲。

例）《美しい水車小屋の娘》D795、

《冬の旅》D911

【ロマン派中期】

・標題音楽の確立

　ー　文学などと結びついて、標題に関連する思想や観念・感情を表現しようとした音楽。ベルリオーズが創作を本格化。

・交響詩

　ー　リストは詩的ないし絵画的内容に基づいて作られた標題音楽の一種を交響詩と名付けた。通常は一楽章形式のものをいう。

【ロマン派中期の作曲家】

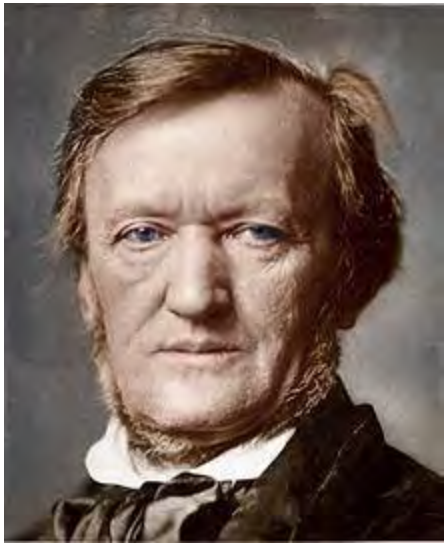
エクトール・ベルリオーズ（1803-1869）：《幻想交響曲》

　第1楽章〈夢、情熱〉、第2楽章〈舞踏会〉、第3楽章〈野の風景〉
　第4楽章〈断頭台への行進〉、第5楽章〈魔女の祝日の夜の夢〉

フランツ・リスト（1811-1886）：《前奏曲》

*　ラマルティーヌの詩にある「人生は死への前奏曲」という考えに基づいた人生観で構成。

## リヒャルト・ヴァーグナー（1813-1883）



「楽劇」を唱導。

＜楽劇＞

・ドイツ語でMusikdrama。ヴァーグナーの造語。

・音楽、文学、舞踊、造形芸術などの総合芸術。

・従来のアリアをつないだオペラではなく、一幕ないし一場を通じて音楽が途切れることなく続くスタイルが用いられた。

例）《ニーベルングの指環》
《ニュルンベルクのマイスタージンガー》
《トリスタンとイゾルデ》

【ロマン派後期】

・古典派の作風を尊重する音楽とヴァーグナーの流れをくむ音楽の併存。

・交響曲の大規模化　ー　オーケストラの巨大化

　　　　　　　　　　ー　演奏の長時間化

【ロマン派後期の作曲家】

ヨハネス・ブラームス(1833-1897)：《交響曲第1番》

アントン・ブルックナー(1824-1896)：《交響曲第4番「ロマンティック」》

グスタフ・マーラー(1860-1911)：《交響曲第1番「巨人」》

フーゴ・ヴォルフ(1860-1903)：《メーリケの詩による歌曲集》

リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)：《ツァラトゥストラはかく語りき》

*ドイツ・ロマン派から影響を受けたロシアの作曲家

　ピョートル・チャイコフスキー(1840-1893)：《ピアノ協奏曲第1番》

【国民楽派】

これまで音楽の中心ではなかったロシア、北欧、東欧、スペインなどで民族意識に目覚めた新しい音楽が盛んになった。

・ロシア国民楽派：グリンカによって基礎が据えられ、ロシア五人組で大成。
ミハイル・グリンカ（1804-57）：オペラ《ルスランとリュドミーラ》

・ロシア五人組　：モデスト・ムソルグスキー（1839-1881）：《展覧会の絵 》、
ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844-1908）：
《シェヘラザード》

＊その他、ミリー・バラキレフ、ツェーザル・キュイ、アレクサンドル・ボロディン

・<フィンランド>　ジャン・シベリウス（1865-1957）：《フィンランディア》
・<ノルウェー>　エドヴァルド・グリーグ（1843-1907）：《ペール・ギュント》
・<チェコ>　ベドジフ・スメタナ（1824-1884）：《わが祖国》より〈モルダウ〉
アントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）：《新世界より》
・<スペイン>　エンリケ・グラナドス（1867-1916）：《スペイン舞曲集》
イサーク・アルベニス（1860-1909）：《イベリア》

［19世紀のフランス、イタリア］
オペラが音楽界の中心
・フランス
－グランド・オペラの誕生、（18世紀末成立の）オペラ・コミック
　ジョルジュ・ビゼー（1838-75）：《カルメン》、《アルルの女》
・イタリア
－オペラ・セリア
　ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）：《椿姫》、《アイーダ》
　ジャコモ・プッチーニ（1858-1924）：《ラ・ボエーム》、《蝶々夫人》
－オペラ・ブッファ
　ジョアキーノ・ロッシーニ（1792-1868）：《セビリアの理髪師》、
　《ウィリアム・テル》

＊ウィーンではオペレッタが確立。
ヨハン・シュトラウスⅡ世（1825-1899）：《こうもり》
（「ワルツ王」とも呼ばれる。《美しく青きドナウ》）

# 6.　近･現代

【近･現代の特徴】
おおよそ20世紀初頭以降の音楽をさす。
近代は様々な主義や様式が併存し、現代は多様な音楽が登場した。

[近代音楽]

例）　印象主義　　ドビュッシー
　　　表現主義　　シェーンベルク
　　　原始主義　　ストラヴィンスキー　など

} 複数音楽の傾向

↓

[現代音楽]

楽派、主義に代わって〇〇音楽という呼称が一般的に

例）　偶然性の音楽　　ケージ
　　　電子音楽　　シュトックハウゼン
　　　ミニマル･ミュージック　　ライヒ　など

## 【近代の音楽に関する用語】

・印象主義　：ドビュッシーに代表される。
自然の印象など心象風景を表した色彩豊かな音楽。
クロード・ドビュッシー（1862-1918）：《「牧神の午後」への前奏曲》

・新ウィーン楽派　：シェーンベルクと弟子のアルバン・ベルク、アントン・ヴェーベルンに対する呼称。表現主義を発展させ、「十二音技法」という新しい音楽を展開した。
－表現主義　：自己の内面（不安／恐怖／狂気など）を表現した音楽。
アーノルド・シェーンベルク（1874-1951）：《月に憑かれたピエロ》
－十二音技法　：従来にない新たな音楽のシステム。
オクターヴの十二の音による音列を作り、それを基に音楽を構成。

・原始主義　：人間の原始的な強さ、野性味を表した音楽。
イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）：《春の祭典》

【現代の特徴】

・従来の音楽概念を破壊するような様式を模索。

　－ 偶然性の音楽、電子音楽、ミニマル・ミュージックなど

・音楽の傾向は、20世紀後半の「科学技術」と深く関わり合う。

⇒　コンピューターの発達

・西洋音楽中心主義の崩壊

・アジア・アフリカの民族音楽の再評価

【現代の作曲家】

オリヴィエ・メシアン（1908 - 1992）:《トゥランガリラ交響曲》

ジョン・ケージ（1912 - 1992）:《4分33秒》

ヤニス・クセナキス（1922 - 2001） :《メタスタシス》

カールハインツ・シュトックハウゼン（1928 - 2007）:《電子音楽とトランペット、ソプラノ独唱、バス・クラリネット、バス独唱のための「シリウス」》

武満徹（1930 - 1996）:《系図　若い人たちのための音楽詩》

スティーヴ・ライヒ（1936 - ） :《手拍子の音楽》

# 日本音楽編

【日本音楽】
日本音楽：広義では西洋音楽を含むが、狭義には江戸時代までに成立した日本の伝統音楽を指す。

【邦楽】
「洋楽」（西洋音楽）の対語として用いられる。邦楽器を主体とする音楽。

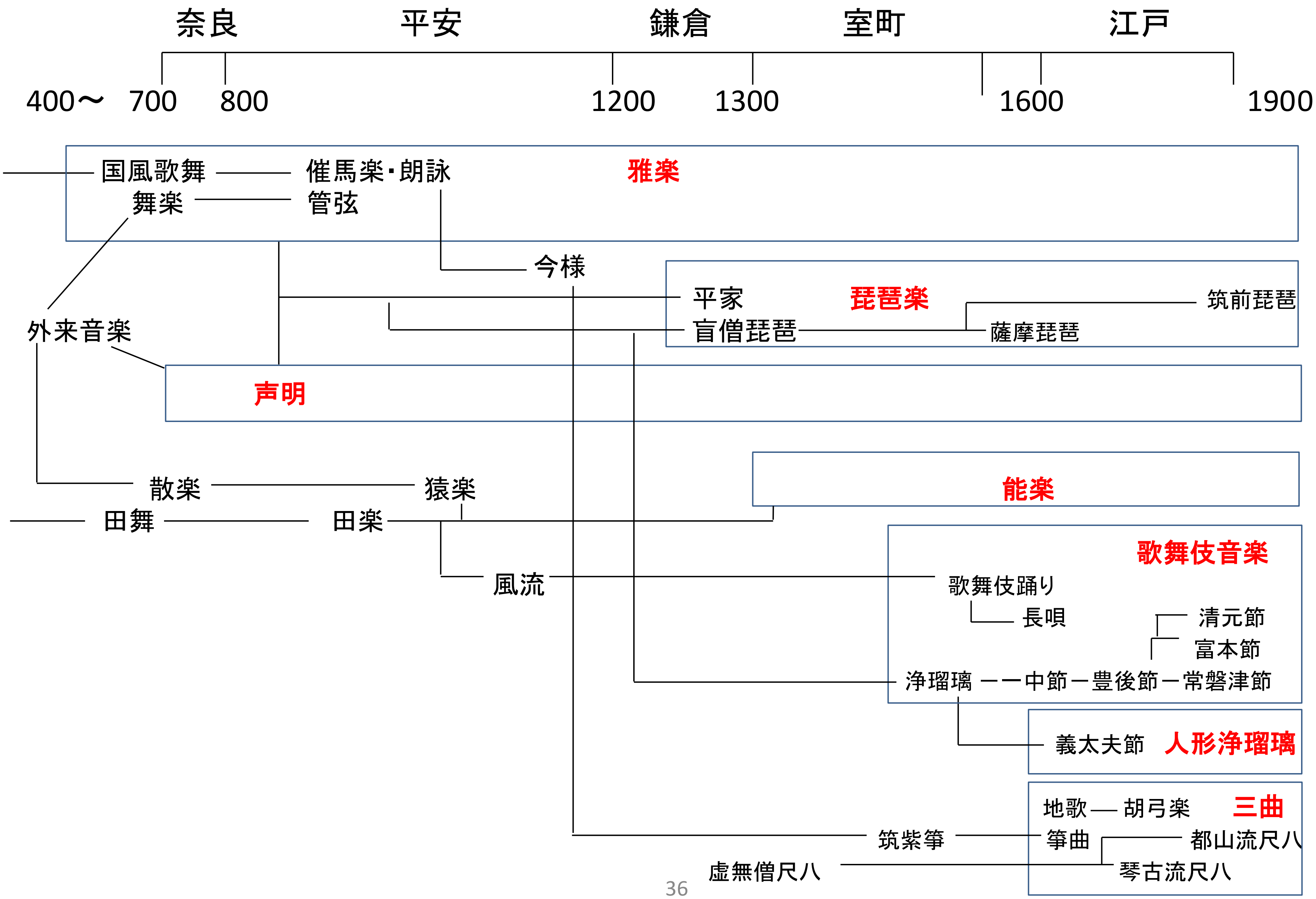
**日本音楽史の時代区分**

先史
古代…奈良、平安
中世…鎌倉、室町
近世…江戸
近現代…明治、大正、昭和～

**日本音楽の特徴**

・音楽種目の並列的な共存
・文芸・舞踊・演劇・宗教との結びつき
・声楽中心
・ヘテロフォニー
・見えない音楽理論
・多様な楽器・記譜法
・旋律型（限られた組み合わせで構成）

# 日本音楽史の系譜



奈良
平安
鎌倉
室町
江戸
400～
700
800
1200
1300
1600
1900
国風歌舞
催馬楽・朗詠
雅楽
舞楽
管弦
今様
平家
琵琶楽
筑前琵琶
盲僧琵琶
薩摩琵琶
外来音楽
声明
能楽
散楽
猿楽
田舞
田楽
歌舞伎音楽
風流
歌舞伎踊り
長唄
清元節
富本節
浄瑠璃
中節
豊後節
常磐津節
義太夫節
人形浄瑠璃
地歌
胡弓楽
三曲
筑紫箏
箏曲
都山流尺八
虚無僧尺八
琴古流尺八

# 古代

【奈良・平安時代】

雅楽： 宮中や社寺などに伝承されている楽舞（がくぶ）や歌舞（うたまい）の総称。
平安時代に現在に伝わる雅楽の基が整えられた。

・種類

①国風歌舞（くにぶりのうたまい） ： 日本列島古来の歌舞に由来する演目。
- 御神楽（みかぐら） ： 宮中で奏するもの。（民間のものは里神楽）
- 東遊（あずまあそび） ほか

②楽舞（舞楽、管弦） ： 外国から伝来した楽舞が起源。
- 左舞（さまい） ： 唐楽（とうがく）（中国伝来の楽舞）
- 右舞（うまい） ： 高麗楽（こまがく）（朝鮮半島と中国東北部伝来の楽舞）

③歌物（うたもの） ： 楽舞の影響を受けて平安時代に完成した歌謡。
- 催馬楽（さいばら） ： 各地の民謡を取り入れた宮廷歌謡。
- 朗詠（ろうえい） ： 和漢の漢詩由来の歌謡。

# 雅楽の楽器

・ふきもの

①横笛（高麗笛（こまぶえ）、龍笛（りゅうてき）、神楽笛）
②篳篥（ひちりき）・・・雅楽の中心となる旋律楽器
③笙（しょう）

・うちもの

④鞨鼓（かっこ）
⑤三ノ鼓（さんのつづみ）
⑥鉦鼓（しょうこ）
⑦大太鼓（だだいこ）
⑧楽太鼓（がくだいこ）
⑨笏拍子（しゃくびょうし）

・ひきもの

⑩琵琶
⑪箏（こと、そう）
⑫和琴（わごん）

①

②

③

④

⑤

⑥

⑧

⑨

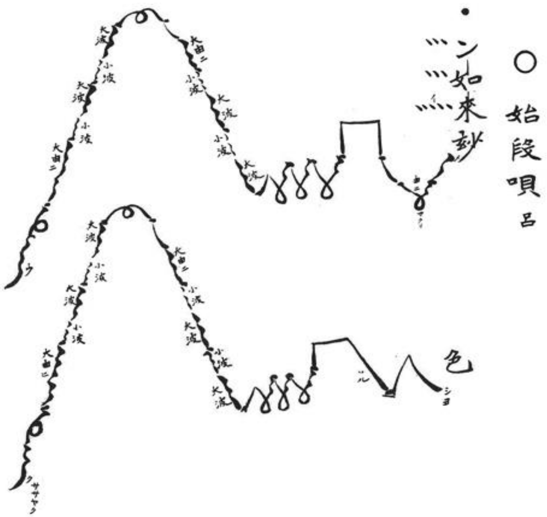
⑩

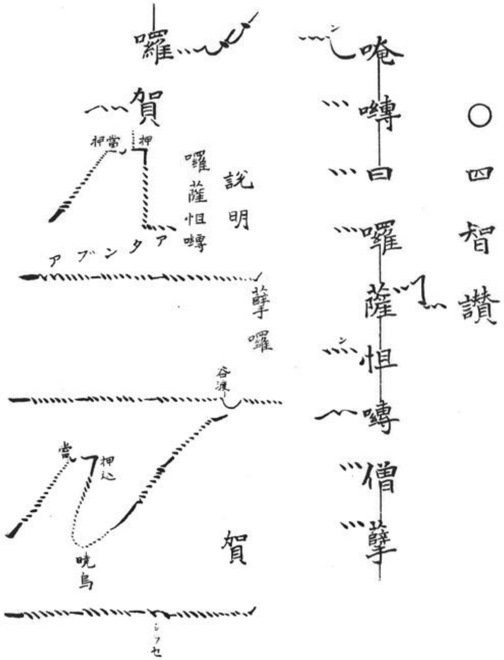
⑪

写真提供：伶楽舎、協力：国立劇場

**声明**（しょうみょう）：僧侶が仏教儀礼で行う単旋律の声楽の総称。
成立時期と地域により奈良声明、平安声明（天台声明・真言声明）、鎌倉声明、黄檗（おうばく）声明などがある。

**博士**（はかせ）　：声明の楽譜をいう。旋律の動きを表す記号。




出典 『縁山声明集』 大本山増上寺

# 中世

【鎌倉・室町時代】

琵琶楽：琵琶を用いる音楽の総称。

・種類

①雅楽琵琶：雅楽で用いられていた琵琶。後に琵琶法師の手に渡る。
今日の雅楽では唐楽の管弦と催馬楽に奏される。

②平家琵琶：〈平家物語〉の詞章を語る際に伴奏として用いる琵琶。
その音楽を平曲(へいきょく)または平家という。

③盲僧琵琶：盲目の僧侶たちが用いる琵琶で、経文をこの琵琶の伴奏で唱えていたとされる。

- 薩摩琵琶
- 筑前琵琶

（薩摩琵琶・筑前琵琶）盲僧琵琶が源流。近代に発展。

- 錦琵琶：薩摩琵琶の一種。大正末期に考案。

能楽：能と狂言の両方を合わせていう。

能　ー　歌舞劇。多くの演目に能面を用いる点に特徴がある。能舞台で狂言と交互に演じられる。

狂言ー　対話で成り立つ喜劇で様式的なセリフを基本とするが、舞・歌・語りの技法も重要。

［歴史］

・散楽（さんがく）：奈良時代に大陸から伝来

・猿楽（さるがく）：平安中期に散楽の中の寸劇が代表芸に

ー　歌舞を取り入れた「能」と滑稽なセリフ劇の「狂言」に分化

・室町時代に観阿弥、世阿弥の父子が大成

・江戸時代には武家の式楽（儀式に用いられる芸能）として幕府が保護

［音楽］

・謡曲　　：能の声楽部分のことで、歌とセリフとを指す言葉。

謡（うたい）とも呼ばれる。

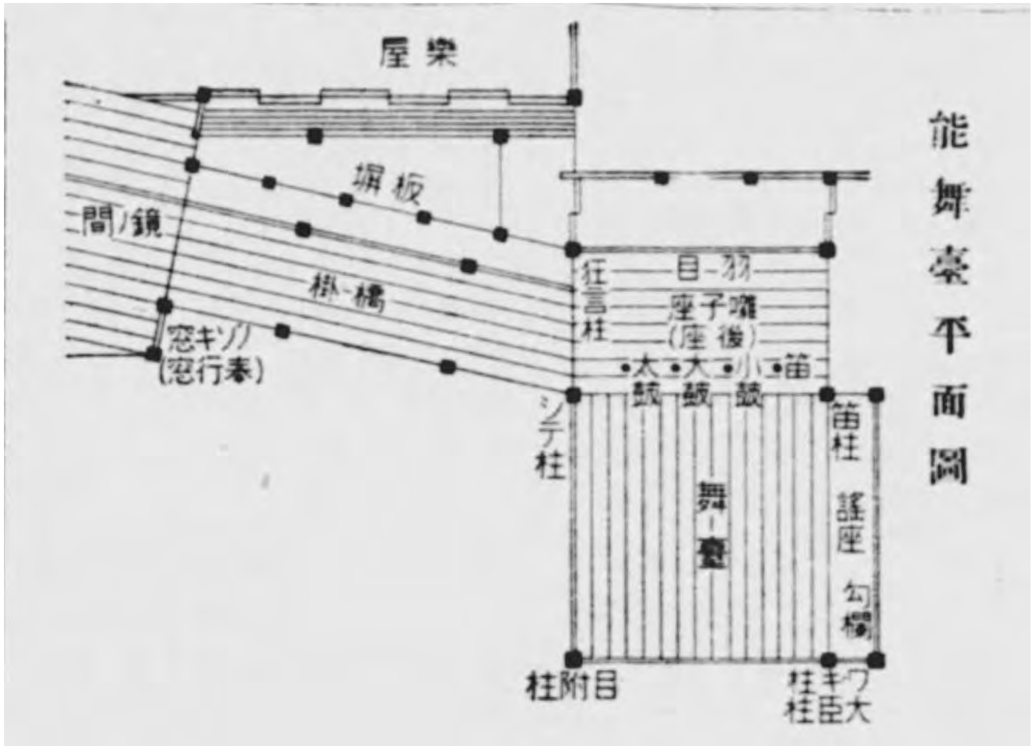
*謡曲は「能の脚本」の意にも用いられる。（例：『謡曲二十番』）

・囃子（はやし）：四拍子（しびょうし）からなる。

ー　笛（能管）、小鼓（こつづみ）、大鼓（おおつづみ）、太鼓

## （参考）

・能の舞台と上演




出典 『温古抄 : 国語便覧』星野書店.
国立国会図書館所蔵.
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1455983/12>

役籍と流儀：
シテ方（主役） → 五流派
（観世（かんぜ）、宝生（ほうしょう）、金春（こんぱる）、金剛（こんごう）、喜多（きた））
ワキ方（脇役）
狂言方（能間（のうあい）担当の役者）
囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓）

# 近世

【江戸時代】

・三味線の伝来⇨近世の始まり

中国の三弦(サンシェン)が14-15世紀に琉球に伝わり三線(さんしん)となり、
永禄年間 (1558-1570) までに大阪の堺港にもたらされた。
琵琶法師によって改造され三味線と呼ばれるようになった。

・三味線の種類(*)

①細棹(ほそざお) ー 長唄(ながうた)(※1)
端唄(はうた)、小唄(こうた)(※2)

②中棹(ちゅうざお) ー 常磐津節(ときわずぶし)(※1)
清元節(きよもとぶし)(※1)

③太棹(ふとざお) ー 義太夫節(ぎだゆうぶし)
津軽三味線

(*)曲種は一例。
(※1) 歌舞伎(かぶき)の伴奏音楽として発達
(※2) 江戸時代の流行り唄

人形浄瑠璃：別名〈文楽〉とも呼ばれる。

浄瑠璃は中世以降語られた物語がその起源。

伴奏は琵琶または扇拍子を用いたが、三味線が取って代わった。

それまでにあった人形芝居と結びつき、語り手・三味線弾き・人形遣いによる人形浄瑠璃が成立。

義太夫節：

竹本義太夫（1651-1714）が道頓堀に人形浄瑠璃芝居の竹本座を旗揚げ（1684年）して創始。

専属の台本作者として近松門左衛門（1652-1724）を迎え、二人の連携で多くの作品を上演した。

作品例）

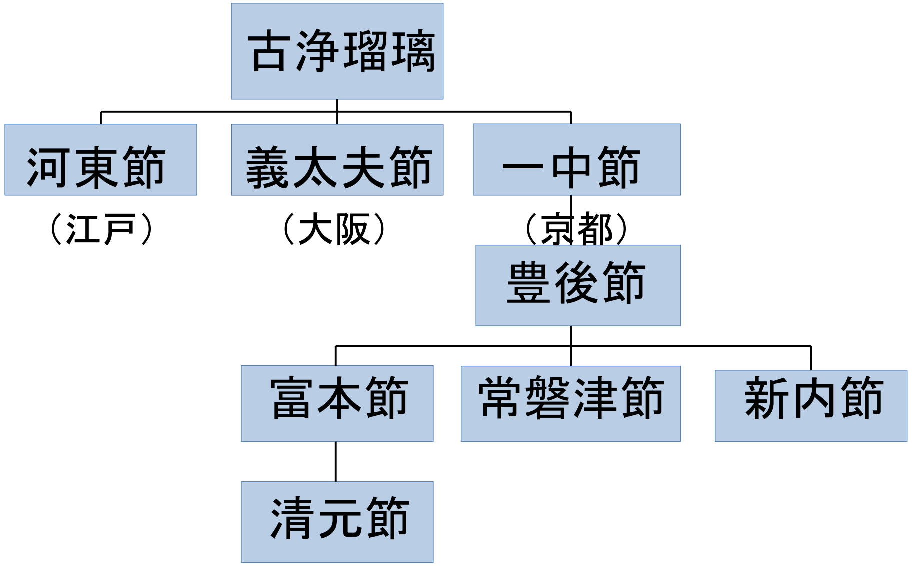
時代物《国性爺合戦》

（こくせんやかっせん）

世話物《曽根崎心中》

（そねざきしんじゅう）

【主な浄瑠璃の系譜】



歌舞伎：

＜歌舞伎音楽の変遷＞

慶長8年頃・・・ 阿国歌舞伎（おくにかぶき）
（1603） ー 出雲阿国（いずものおくに、生没年未詳）らの「かぶき踊り」
ー 囃子は四拍子。

遊女歌舞伎 ー 三味線が加わる。

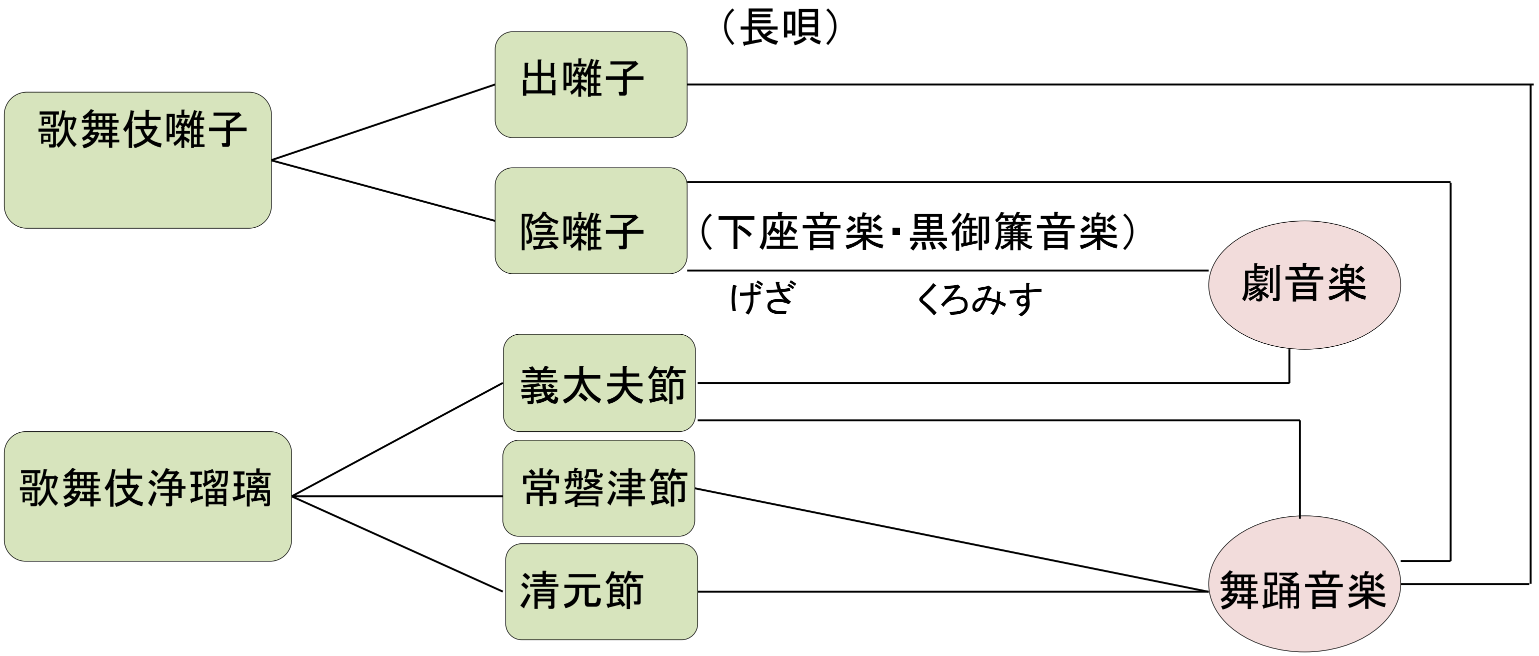
寛永6年以降・・・ 若衆歌舞伎（わかしゅかぶき）
（1629）
野郎歌舞伎 ー 歌舞中心から演劇性（伎）が強まる。
四拍子・三味線に加え小唄の登場。

元禄期 ・・・・ 元禄歌舞伎
（1688-1704） ー さらに演劇性が高まり、古浄瑠璃が用いられる。
義太夫以前の浄瑠璃

古浄瑠璃に代わって義太夫節。小唄に代わって長唄。

明和～天明・・・・天明歌舞伎 ー音楽的・舞踊的様式を確立。
（1764-1789）

［現在の歌舞伎音楽］




その他 （箏・尺八・胡弓など）

三曲(さんきょく)：地歌(じうた)、箏曲(そうきょく)、尺八の音楽の総称。
尺八の代わりに胡弓の場合もある。

・地歌(じうた)　：京都や大阪を中心に発展した三味線(三弦)音楽。
「土地の歌」の意。

・箏曲(そうきょく)：箏(こと)を主奏楽器とする音楽。17世紀中ごろ、筑紫箏(つくしごと)を基に八橋検校(やつはしけんぎょう、1618-85)が創始。

流派・・・生田(いくた)流、山田流

［楽器］

・尺八　：現在、主に演奏されるのは普化(ふけ)尺八。
そのほか、古代尺八(または雅楽尺八)、一節切(ひとよぎり)、天吹 (てんぷく)、多孔尺八など。

流派・・・琴古(きんこ)流、都山(とざん)流、明暗(みょうあん)流　など

・胡弓　：擦弦楽器の一種。
江戸時代には三曲合奏で盛んに演奏された。

**三曲合奏**：
典型は、三味線、箏、尺八による地歌の手事物（てごともの）の合奏。

– 手事物：地歌や箏曲で歌の合間に挿入される器楽の間奏部分。また器楽演奏を聴かせることを目的とした部分をいう。

作品例）
《八重衣》、《夕顔》、《宇治巡り》など

三曲合奏の様子

出典　菱川師宣筆『團扇繪づくし』鱗形屋.
国立国会図書館所蔵.
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3010871/15>

# 近現代

【明治、大正、昭和～】

開国

西洋音楽が流入するも、その影響を受けて
近世までの音楽が変化したのは明治以降。

幕藩体制崩壊
明治維新

・能楽は武家の式楽ではなくなる。
・雅楽のみ宮中での奏楽のため雅楽局
（現在の宮内庁式部職楽部）に設置。

文部省
音楽取調掛

（おんがくとりしらべがかり）

・明治12年（1879）設置。
＜三つの指針＞
第一「東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること」
第二「将来国楽を興すべき人物を養成すること」
第三「諸学校に音楽を実施すること」
・伊沢修二を中心に最初の唱歌教材『小学唱歌集』を刊行。
・明治20年（1887）東京音楽学校に改称。

［日本の伝統音楽に西洋音楽を適用］

日本の伝統音楽の五線譜化

・最初の成果 ― 音楽取調掛編『箏曲集』（1888）

・田中正平が設立した邦楽研究所

・東京音楽学校 邦楽調査掛*

} 伝統音楽の組織的な採譜を行う

*（ほうがくちょうさかかり、1907-1943？）
日本音楽の調査と保存を目的とした官立の音楽専門機関

新日本音楽：大正から昭和初期にかけて箏曲家・宮城道雄（1894-1956）らが中心になって展開した音楽運動および作品を指す。
洋楽の要素を取り込み新しいスタイルの日本音楽を登場させた。
作曲家・本居長世（1885-1945）も運動に関わる。
楽器の主流は箏と尺八。

作品例） 宮城道雄：《春の海》
（編成：箏、尺八）

現代邦楽：主に日本の伝統楽器を用いて創作された音楽の総称。邦楽の伝統に立脚しながら洋楽作曲法などを導入し、作品に現代の息吹を与えた。

[1960年代からの運動]

・邦楽4人の会 （尺八：北原篁山、箏：後藤すみ子、三絃：矢崎明子、十七絃：菊地悌子）

・日本音楽集団 （長澤勝俊、三木稔らの作曲家が中心となり結成）

・尺八三本会 （横山勝也、山本邦山、青木鈴慕）

作品例）

・武満徹：《ノヴェンバー・ステップス》
（ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団創立125周年記念の委嘱作品）
（編成：琵琶、尺八、管弦楽）

・唯是震一（ゆいぜ しんいち、1923-2015）：
《尺八、箏とオーケストラのための協奏曲第三番》

・伊福部昭（1914-2006）：《郢曲「鬢多々良」》（えいきょく びんたたら）
（編成：笛、能管、笙、篳篥、龍笛、筑前琵琶、薩摩琵琶、箏、十七絃、打楽器）

# 【参考資料】

［全般］

・浅香淳　1977『新音楽辞典』 東京:音楽之友社
・海老澤敏, 上三郷祐康, 西岡信雄, 山口修（監修） 2012『新編　音楽中辞典』 東京:音楽之友社
・岸辺成雄ほか（編） 1981-1983『音楽大事典』 東京:平凡社
・久保田慶一（編） 2009『キーワード150音楽通論』 武蔵野 : アルテスパブリッシング
・ミヒェルス,ウルリヒ（編） 1989『図解音楽事典』 東京:白水社
・セイディ,スタンリーほか（編） 柴田南雄, 遠山一行（総監修） 1993-1995『ニューグローヴ世界音楽大事典』 東京 : 講談社
・音楽之友社（編） 2008『標準音楽辞典』 新訂 第2版 東京:音楽之友社

［西洋音楽通史］

・久保田慶一ほか　2017『はじめての音楽史』決定版　東京:音楽之友社
・千蔵八郎　2009『基本音楽史』 東京:音楽之友社

・高橋浩子, 仲村孝義, 本岡浩子, 綱千毅（編） 1996『西洋音楽の歴史』 東京：東京書籍
・皆川達夫, 倉田喜弘（監修） 上尾信也 ほか（解説） 2003『詳説総合音楽史年表』 東京：教育芸術社
・カッロッツォ,マリオ ; チマガッリ,クリスティーナ 2009-2011『西洋音楽の歴史』 川西麻理（訳） 東京：シーライト パブリッシング
・グラウト,ドナルド・ジェイ ; パリスカ,クロード・V. 1998-2001『新西洋音楽史』 戸口幸策, 津上英輔, 寺西基之（訳） 東京：音楽之友社

［西洋音楽各論］

・伊福部昭 1985『音楽入門』改訂版 大阪：現代文化振興會
・金澤正剛 2015『中世音楽の精神史』 東京：河出書房新社
・神木勇介 2007『オペラにいこう! 』 東京：青弓社
・ザックス,クルト 1969『音楽の起源』 皆川達夫, 柿木吾郎（訳） 東京：音楽之友社

［日本音楽（全般）］
・平野健次ほか（監修） 1989『日本音楽大事典』 東京：平凡社
・吉川英史（監修） 1984『邦楽百科辞典』 東京：音楽之友社

［日本音楽各論］
・小林淳　2004-2005『伊福部昭音楽と映像の交響』 東京：ワイズ出版
・田中悠美子，野川美穂子，配川美加（編） 2009『まるごと三味線の本』 東京：青弓社
・西川浩平 2013『和楽器の世界』 東京：河出書房新社
・配川美加 2016『歌舞伎の音楽・音』 東京：音楽之友社
・服部幸雄，富田鉄之助，廣末保（編） 2011『歌舞伎事典』 新版 東京：平凡社
・藤田洋（編） 2006『歌舞伎ハンドブック』 第3版 東京：三省堂
・星旭　1990『日本音楽の歴史と鑑賞』 東京：音楽之友社
・細川周平，片山杜秀（監修）　日外アソシエーツ株式会社（編） 2008『日本の作曲家―近現代音楽人名事典』 東京：日外アソシエーツ
・吉川英史 2016『日本音楽文化史』 大阪：創元社

・音楽文化創造伝統音楽委員会（監修） 2001『実践「和楽器」入門』
東京：トーオン
・教芸音楽研究グループ（編） 1996『スーパーガイド of 雅楽』
東京：教育芸術社
・国立歴史民俗博物館（編） 1992『弾・吹・打』 佐倉：国立歴史民俗博物館
・NHK邦楽技能者育成会（編） 2000『演奏家のための日本音楽の理論と実践』
東京：NHK邦楽技能者育成会テキスト編纂委員会

［インターネット］
文化デジタルライブラリー http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/
日本雅樂會 http://www.nihongagakukai.gr.jp/index.html
日本琵琶楽協会 https://nihonbiwagakukyokai.jimdo.com/
能楽協会 http://www.nohgaku.or.jp/index.html
日本伝統文化振興機構 http://www.jtco.or.jp/
歌舞伎 on the web http://www.kabuki.ne.jp/
日本三曲協会 http://www.sankyoku.jp/
日本音楽集団 http://promusica.or.jp/index.html
（※）全て参照日は2018-8-8.